

3年間のパプアニューギニアでの活動を終えて

平成 24 年度 3 次隊 養殖 鹿野陽太

3年間のパプアニューギニアでの活動も終わり、先週日本に帰ってきました。パプアの生活が夢のように思えてきて、3年もいたのかと不思議な気分になっています。新しいステップに向けてゆっくりと動き出しています。同時にパプアの生活は懐かしい思い出になってきています。

2015年は、いろいろあった1年でした。前半はいつも通りのキウंगाだったのですが、7月くらいからエルニーニョ現象の影響でまったく雨が降らなくなりました。かたや日本は大雨で大きな被害がでていたようですね。本来ならば、7月から10月までは雨季なので、朝からどんよりした天気が続くのが例年のキウंगाなのですが、2015年は雨が降らず川は干上がる寸前までになりました。フライ川を遡ってくる貨物船は、水位が低くなりすぎたためにキウंगाに入港しなくなり、ガソリンや食料の供給が一時ストップしてしまいました。購入制限がかかり、遠くの村へ飛ぶ飛行機も運休してしまいました。エルニーニョ現象による自然災害で、水を使う養殖の活動は中断せざるを得なくなり、結局9月に比較的状況の良かったニューギニア島東端のミリンベイ州のアロタウというところに移りました。



川の水位が低くなり、船は動けなくなった。

アロタウというところは海沿いの美しい町で海の魚が豊富に獲れるところですが、テラピアの養殖にも力を入れようとしていました。ここで、テラピアの人工ふ化器の設置とテラピア稚魚のオス化技術の導入を3か月間おこないました。魚の人工ふ化は日本の水産試験場では一般的なことですが、ここパプアニューギニアではまったく新しいことです。テラピアの受精卵をふ化器に入れて数日保育すると卵がふ化します。ふ化したば

かりの魚は、体が透きとおっているのので、心臓の鼓動を顕微鏡で観察することができます。日本だと中学校でも高校でも顕微鏡を使った理科の実験があって、生物を観察する機会がありますが、パプアニューギニアにはそのような機会はほとんどありません。机の上での授業だけで実験はほとんどありません。実体験を伴わない授業だけなので、すぐに習ったことを忘れてしまいます。一緒に働いていた職員は目を輝かせて生まれた魚の鼓動を観察していました。顕微鏡を使った観察などほとんど初めてだったのですから、目を輝かせて、楽しそうに観察するのも当然です。日本のように実験もある授業がおこなわれて、基礎がしっかりしていれば、この国の養殖ももっと昔から進んでいたかもしれません。子供のころから実のある教育を受けられた自分はなんと幸せかと思いました。この国に3年間暮らして、教育、勉強することの大事さを知りました。



保育中の卵を観察する現地職員



顕微鏡で稚魚の観察をする現地職員

アロタウでの生活はキウンガとは別の面白さがありました。マーケットには海の魚がならび、刺身にできるような新鮮なものもありました。時たま売られているウミガメの肉はおいしかったです。そして、ココナッツの葉で作った色鮮やかなバスケットが売られています。キウンガにはほとんど生えていないマンゴーの木がたくさんあるので、マンゴーがたくさん売られています。いつも新鮮な野菜、果物、魚が食べられたのは本当に幸せだったと思います。



マーケットにならぶ熱帯の魚たち



ココナッツの葉で作られたバスケット



アロタウ周辺のサンゴ礁

3年間で自分はパプアニューギニアの人々に良い影響を与えられたのだろうかと思問自答しています。確かに、稚魚を配って、魚の育て方を教え、大きな魚を収穫する喜びを感じさせることができました。ある漁師に簡易のはえ縄漁の方法を教え、暮らしの足しになる収入を漁から得ることができたと感謝してもらえました。魚のふ化や飼育を教えて、新しい技術をアロタウの人々に伝授することができました。しかし、それ以上に自分はいろいろなことをパプアニューギニアでの生活から学ばせてもらったと思います。自然の中でのびのびと暮らし、その中で培われた観察眼や生きる知恵が脈々と受け継がれていること。ゆっくりと流れる時間に合わせたのんびり生きる生き方。日本に帰ってきて、すし詰め通勤時間帯の列車を見ていたら、自分は足早に過ぎる時間に追われすぐに疲れてしまうだろうと思ってしまいました。パプアニューギニアでの体験や思い出は、疲れた自分を助けてくれる薬のような役目を今後果たしてくれそうな気がします。またいつかパプアニューギニアに行けることを願っています。